

# 人間の生きることの 哀切さが心に残る

関係性のドラマを一步一步再構成

## 厚東洋輔

著者は全集に新たに所収された書簡や、いまなお未刊行の草稿や書簡、関係者のインタビューなど新しい資料を用いながら、ウェーバー夫妻における関係性のドラマを一步一步再構成してゆく。著者がアカデミックな学者でないこともあり、叙述の仕方は論証的というより物語的で、巻のおおむね「読む」という感じが、読者をぐいぐいと最後まで引っ張ってゆく。この読みやすさには翻訳の流麗さもあずかっているのは確かだろう。

「百年前に生きた一組の男女についての矛盾した供述の多彩な混合、それらはジグザグ・パズルのように、時間的な隔たりをおいて一つの像に結び合わされるであろうか。」行動面での時代制約性と性格面での永遠性が織りなすロマンとし、ウェーバー夫妻の結婚生活が、抑制の利いた筆致で描き出される。

登場人物として生彩があるのが、マリアンネとエルゼ・ヤッフエの二人の女性である。この二人は一九世紀後半から頭著になったフェミニズムの第二波のただ中で生まれた点で共通性をもつ。二人は、女性解放のためには、女性が大学で学ぶことが決定的に重要と感じていたが、当時は教授の許可に基づき、特例として入学することしか可能でなかった。エルゼはマックスが最初に指導した女子学生であり、マリアンネはマックスの友人のリッケルトのもとでようやく勉学を始めることが出

ては強い魅力をも感じた。エ

（大阪大学人間科学研究科教授・理論社会学・社会学説中

来た。二人は、マックスを実質的な指導教員として女性研究者として身を立てることが出来た点で共通性をもつ。他方、マリアンネは財産があり、妻としての役目を第一義と見なし、アカデミスムは「教養」をつける手段であったのに対し、財産のないエルゼにとっては、アカデミスムは職業に就くための経路であり、家庭は人生を形作る一つのアイテ

ムでしかない、という点で対照的であった。

一九世紀の末から二〇世紀の初頭におけるヨーロッパにおいて、最新の論題と見なされたのが「性」であった。フロイトの精神分析、世紀末の芸術運動においても性は重要な課題であったが、とりわけフェミニスムにおいては踏み絵の役割を果たした。従来

の性的タブーを破ることが抑圧された感性を解放するため

の唯一絶対の途と見なす新しい社会運動が、二〇世紀の初頭、ドイツの知識人社会に起こったとき、マリアンネとエルゼは対照的な動きを示した。マリアンネは「夫一婦制」に基づく性的規範を擁護する側に立ったのに対し、エルゼは、夫エドガー・ヤッフエとの破綻した結婚生活を前提に

マックス・ウェーバーと妻マリアンネ結婚生活の光と影

クリスタ・クリューガー著 徳永 恂・加藤精司・八木橋貞 訳  
マックス・ウェーバーをめぐる女性たち  
「百年前に生きた一組の男女についての矛盾した供述の多彩な混合、それらはジグザグ・パズルのように、時間的な隔たりをおいて一つの像に結び合わされるであろうか。」行動面での時代制約性と性格面での永遠性が織りなすロマンとし、ウェーバー夫妻の結婚生活が、抑制の利いた筆致で描き出される。

の初頭におけるヨーロッパにおいて、最新の論題と見なされたのが「性」であった。フロイトの精神分析、世紀末の芸術運動においても性は重要な課題であったが、とりわけフェミニスムにおいては踏み絵の役割を果たした。従来

の性的タブーを破ることが抑圧された感性を解放するため

の唯一絶対の途と見なす新しい社会運動が、二〇世紀の初頭、ドイツの知識人社会に起こったとき、マリアンネとエルゼは対照的な動きを示した。マリアンネは「夫一婦制」に基づく性的規範を擁護する側に立ったのに対し、エルゼは、夫エドガー・ヤッフエとの破綻した結婚生活を前提に

エルゼは世紀末の背景のなかでは「魔性の女」であるが、日本流にいえば「妹の力」の適例だろう。

マリアンネとエルゼは一九〇年代の出会いから死に至るまで、時期によりニュアンスの差があるにしろ固い友情に結ばれていたことも疑われない。マリアンネは「活性化」を、嫉妬抜きで、他の女たちに任せているのだろうか？

マリアンネもエルゼも（母親のヘレーネも含めて）マックスを巡る女達は、知的に卓越している男性にのみ魅力を感じるといふ共通性がある。アカデミックな場は同時にエロス